

2018年 一般の部 最優秀賞

8時15分を読んで

広島県呉市在住

楠生 紫織（くすお しおり）

「8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心」を読み、印象に残った2つのキーワードがある。それは、「許す心」と「多角的な視点」だ。

「許す心」は、進示が著者章子に伝えた言葉「アメリカ人を憎むのは間違いだ。確かに原爆を落としたのはアメリカ人だが、アメリカ人を責めるべきではない。」に、よく表れている。被爆後に遭遇した二匹の化け物や、退院後の進示を冷遇した光子のことを、進示はどこかで許していたと思う。原爆は、家族や健康、生活、住居を一瞬にして奪った。怒りや恨み、憎しみを募らせながら、生きていく方法もあったはず。2016年5月27日、当時現職のオバマ大統領が広島市を訪問した。オバマ大統領が謝罪をしないと事前表明したにも関わらず、広島市民や被爆者はオバマ大統領を受け入れた。進示の、過去を戦争の怖さとして伝え、平和を志向する「許す心」は平和都市広島市に、今も受け継がれている。

「多角的な視点」は、それぞれの立場に立って考えるという視点で、道徳的に基本姿勢である。しかし、原爆を落とされた広島市民にとって、アメリカの立場に立って考えることは、非常に困難を極めたであろう。家族を殺害した犯人の立場に立ち、理解するという行為は、自らを怒りや憎しみに縛る行為になるかもしれない。しかし、進示は原爆を投下したB29爆撃機機長ポール・ティベットに対し、「有能な軍人であり、パイロットだった。与えられた使命に従ってちゃんと使命を遂行したのだ。自分の命を冒して」と考えている。当時、ポール・ティベットはアメリカ軍内で上司や国の指揮命令に背くことはできなかったであろう。多くの人名を奪う核兵器を投下することを正当化する、思想教育を受けていたかもしれない。多角的な視点を持っていたのは、美代子も同様だ。美代子は原爆傷害調査委員会の調査で、レントゲン技師が手持ちぶさたなのを気の毒に思い、レントゲン撮影を受けた。レントゲン技師は、人の役に立とうとここに来ているのに、それが叶わないことを気の毒に思い、撮影に応じた。これで美代子は肺がんが発見され、命が助かった。進示と美代子は、常に狭い視野に囚われず、多角的視点および広い視野で過去や未来を捉えていた。

今日、「許す心」と「多角的な視点」は大切にされているだろうか。進示は「異なった文化の人たちがお互いに理解しようとする世界」、「二度と戦争の恐ろしさを体験しなくてよい世界」を願った。私は、残念ながらこの2つは叶っていないと考える。例えば、核兵器や貧困問題、人種差別、思想差別。国家間には留まらず、いじめやLGBTへの偏見、高齢者・障がい者への理解不足など、許す心と多角的視点が欠けた、身近な問題がたくさんあ

る。

私は、原爆で失ってしまった時計の長針と短針は、この「許す心」と「多角的な視点」なのかもしれないと思った。国連本部で盗まれた時計は、この長針と短針を探す旅に出たのだ。いつか、「許す心」という長針と、「多角的な視点」という短針が時計と出会い、平和という時間を刻むために。